

ミラクルバースデー

ミラクルバースデー

私の名前は海恋^{みこ}。今日は、私のたん生日。

でも、お母さんとお父さんは急な仕事で、たん生日を祝ってもらえないんだ。そのかわりに昨日お父さんがカワイイ宝箱を買ってくれたの。でも、その宝箱が私にすてきな一生の思い出をつくってくれるものだとは、考えてもいなかった……。

ピンポーン。

「こんにちはー。海恋ちゃんおたん生日おめでとう」

この子は私の大親友の風美^{ふうみ}ちゃん。すごくやさしいし、たよりになる親友なんだ。あつ、話を続けるね。

「いらっしやーい」

「あれ、お母さんはいないの」

「うん。お母さんもお父さんも急な仕事で会社に行っちゃったんだ。せつかくのたん生日なのに……。あーあ」

「それじゃあ、風美が祝ってあげるよ」

「えー本当に！　ありがとう」

私は、風美ちゃんのいきなりのお祝いにびっくりした。そして、私の部屋でミニたん生日会をすることになった。私はリビングルームでおかしの準備をした。十五分くらいたって部屋にもどると、風美ちゃんが部屋を輪かざりできれいにしてくれていた。

「わーきれい。これ風美ちゃんがかざってくれたの！」

「うん、きれいでしょ。海恋ちゃんがおかしの準備をしている間に、部屋をかざっておいたんだよ」

「ありがとう。こっちもおいしそうなおかしもってきたよ。なんだかワクワクしてきたネ。それじゃあ、さっそく始めよう」

カーテンを閉めて、電気を消したら部屋は真っ暗。そしたら、風美ちゃんが歌を歌ってくれた。ちよっぴりおんちだけど、心のこもった歌だった。そして私たちはいっしょにおやつを食べた。

「おいしいねー。海恋ちゃん」

「うん。おいしいねー、風美ちゃん」

自然と笑顔になった。そして、私はお父さんを買ってもらった宝箱を見せた。

「これ、お父さんからのたん生日プレゼントなんだ」

「わぁーカワイイ。それってもしかして宝箱？ 何を入れているの」

「えっとね、中にはいちごのキャンディーが入っているんだ。いっしょに食べよう」

「うん。じゃあ一個いただくかな」

そして宝箱をあけると……。ピカーッ。すっごく明るい光が宝箱から飛び出した。見ると、かべににじ色の大きな穴があいていた。

「なにこれく!!」

「なんだろう。この穴。海恋ちゃん知ってる？」

「えくそんなの知らないよ」

そう言いながら私たちは、穴に近づいていった。その時、ものすごいん力で私たちは穴にすいこまれた。

「あくあく」

—どのくらいたっただろう……。風美ちゃんは、私より先に気をとりもどしていた。

「わあっ！ 海恋ちゃん起きてっ、起きて」

「うくくん。なあに」

私は気をとりもどしたばかりなので、頭がボーツとしてなにがなんだかわからない。よく見てみると、なんとそこはおかしの国だった。私たちがねている所は、わたがしでできている雲だった。すこし雲をちぎって食べると…。

「あま〜い。おいしい」

私たちはそろって言った。

「ほかのところにも、行ってみようよ」

と言って雲から足を出したとたん、ピューン。雲から落ちていった。ここは地上ではない。空の上だったのだ。

「ひやく。海恋ちゃん、たくすくけくて〜」

私ははらはらして、どうすればいいか分からない。

すると、雲がすごいスピードで落ちていく風美ちゃんに、近づいていく。まさかと思ったけど、みごと雲が風美ちゃんを助けてくれた。私はうれしくて、うれしくてたまらなかった。そしてゆっくり雲にのって地上へおりていくと、おかしの国の動物たちが笑顔でこっちを見てはく手してくれた。なぜはく手をしているのかは知らないけど、ちよつとうれしかった。地上におりたら、りすさんが近づいてきてこう言った。

「あの雲は百年に一度しかこない伝説の雲なんだよ」

「え〜〜！」

私はすごくびっくりした。百年に一度しかこない雲なんて私たちはなんて運がいいんだらう。そんな感じでのんびりしている間に、あらたな事件が起こったのだ。★

ガリガリ！ バリバリ！ ガシヤン！

とつ然、大きな音がした。

「大変だあー！」

うさぎさんがさげんだ。

「あつ、あれを見て！」

風美ちゃんが指をさしたところを見ると、そこには、おかしの家をこわしている竜の姿が見えた。すると、パンダさんが説明してくれた。

「あの竜は、このおかしの国の空を守っている竜です。めったに出てくることはない、おとなしい竜なのですが、何であばれているのでしょうか」

「あつ！」

二人は顔を見合わせて同時にさげんだ。

「どっ、どうしたんですか」

りすさんがびっくりして聞いた。

「さっき、わたしたち、雲を食べちゃったんです。もしかしたら、それでおこつてるんじゃない……」

二人がおそろおそろ答えているときだった。竜がこちらをにらんでほえた。

「わしの大事な雲を食べたのはだれだ！」

二人は思わずだまりこんでしまった。もし、しゃべると竜におそわれるかもしれないと思ったからだ。竜は大きな目でぎろりとあたりを見わたし、雲を食べた人を探しているようだった。

二人は、決心して竜のそばに走り寄った。

「竜さん、ごめんなさい。わたしたちが、雲を食べてしまったんです。大事な雲とは知らずに……。本当にごめんなさい。おわびに、わたしたちがおいしい雲を作りますので、待っててください」

竜はふきげんそうに答えた。

「なに、おまえたちにおいしい雲が作れるのか？」

二人は顔を見合わせて、こくりとうなずいた。

それから二人は、大いそがしで動き回った。まず始めに、二人は大きなわたがし機をさがすことにした。おかしの国の住人に聞いて回ったが、なかなか見つからなかった。だんだんつかれてきたころ、大きな家が見えた。家の中をのぞいてみると、それはゾウの家だった。

「すみません。大きなわたがし機をさがしているのですが、どこにあるか知りませんか」

お父さんゾウが答えた。

「それならうちにあるぞう」

「本当ですか。ぜひ貸してください」

「いいとも、いいとも。持っていきなさい」

こうして、二人は大きなわたがし機を借りることができた。

次に、雲のもとになるざらめをさがすことにした。すると、お母さんゾウが、

「雲を作るの。それなら、星のざらめを使うといいわよ」

「星のざらめ？」

「一番高い砂糖の山の頂上に、花がさいているわ。その花の中から取れる星の

ざらめで作ると、おいしい雲ができるわよ」

「ありがとうございます！」

二人はさっそく砂糖の山に向かった。砂糖の山はとても登りにくかった。何度も転んだり、すべったりしながらも、がんばって頂上を目指した。

「あっ！ あの花じゃない」

海恋が走り出した。そこには、色とりどりの花があたり一面にさいていた。

二人は、一つ一つの花から、星のざらめを取り出した。袋いっぱい星のざらめを集め、急いで山を下りた。

動物たちに作り方を聞きながら、雲作りを始めた。おいしい雲になりますようにという願いをこめて作った。

そして、ついに、雲が完成した。

さっそく竜のもとへ急いだ。竜は、二人が作った雲をじっくりながめた後、口に入れた。

「……。こんなうまい雲を食べたのは初めてだ。おまえたち、なかなかやるなあ」

竜は感心して、二人をながめた。

「おいしい雲を作ってくれたお礼に、これをやろう」

と言って、竜は二人に、光りかがやくものをわたした。よく見ると、それは七色にかがやく竜のうろこだった。

「うわー、きれーい」

喜んだその時だった。ピカーツ。すっごく明るい光が二人を包みこんだ。だんだんと意しきが遠のいていく中で、動物たちの「おたん生日おめでとう」という声がかすかに聞こえた気がした。

目を開けると、二人は海恋の部屋にたおれていた。今までののは夢だったのかな。海恋は、ふと宝箱を開けてみた。すると、宝箱の中には、いちごのキャンデーと一緒に、確かに七色に光るうろこが入っていた。

風美ちゃんも目を覚ましていた。二人は、顔見合わせて笑った。

私は、このたん生日に起きた不思議な出来事を忘れることはないだろう。

ミラクルバースデイ

—